

2026年度 第3回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 特任教授 中澤 静男

1. 開催日時 2026年9月12日(土) 10時～12時20分
2. 開催方法 ZOOMを用いたオンライン開催
3. 参加者 中谷(高野口小)、西(サニックス資源開発グループ)、
岸田(東洋ライス)、片山(長浜ユネスコ協会)、中澤(片桐西小)、島(七隈小)
橋本(福岡市栄養教諭)、服部(東部北)、
加藤(川上村役場)、長友(本学研究部員)
源流館: 尾上・高田・木村・古山・植西
奈良教育大学学生: 勝田 教員: 杉山・中澤・河野 合計19名

4. 内容

(1) 信太ゴッドフェスティバル(中谷氏)

毎日、信太地区からタクシー登校の児童が2人いた。「どんなところなのか知りたい」

遠足で、紀の川の支流沿いを信太まで歩く。滝を見つけて、児童のテンションが急上昇。

「いいところやなあ」⇔「いいところなんか何もない。これまで信太に住んでいてよかったのは
1回だけあった祭の思い出だけ。」

祭りについて知りたくなり、信太地域の住む広岡さんに昔の祭りについてインタビューする。

→ 自分たちもお祭りがしたい!

九重地区でインタビュー調査 参加者がすごく多く、にぎやかだった。おみこしもあった。

「お祭りを復活させてほしい」⇔「忙しいから、いまさら迷惑」

信太地区は人口減少し、存続も危機的状況

関係人口が増えると「まちおこし」になるのでは?

→ 「きずな、感謝、歴史」をテーマに祭を復活しよう!

- ・地元の相撲を体験

- ・保護者にも協力してもらって地元の食文化体験 くるみもち、地元野菜、ポテト、郷土料理

→ 神社に行き、絵馬がないことに気づく

【サニックスとの連携のきっかけ】

『お仕事年鑑』を見て、電話やメールでアタック。

「ESDの紹介、連携について相談にのってほしいこと」

「こんな教育がしたいんです」という中谷先生の熱い思いを伝える

→ 返事があったのがサニックスさんだけ

→ ペットボトルキャップをつかって絵馬をつくりましょう

- ・お祭りには280人の参加者があった。

- ・次世代に快適な環境を残すため、「捨てないのが当たり前」を絵馬を通して伝える

(2) サニックス資源開発グループの事業紹介

①廃プラの燃料化と発電事業 → 石炭の消費量を減少

②太陽光パネルのリサイクル : 2020年～2040年に大量廃棄が見込まれている

金属部分はリサイクル ガラス部分は細く砕いて道路舗装の材料に

③廃油・廃液の処理

再生油 Bio：飲食店等から発生する廃液から油分のみを分離回収し、化石燃料の代替品として利用可能な再生燃料の製造
『固形燃料 REBON』を開発

④マテリアルリサイクルワーク 分別体験により分別への意識化を高める

海のプラゴミなどを素材ごと、色ごとに分ける分別体験

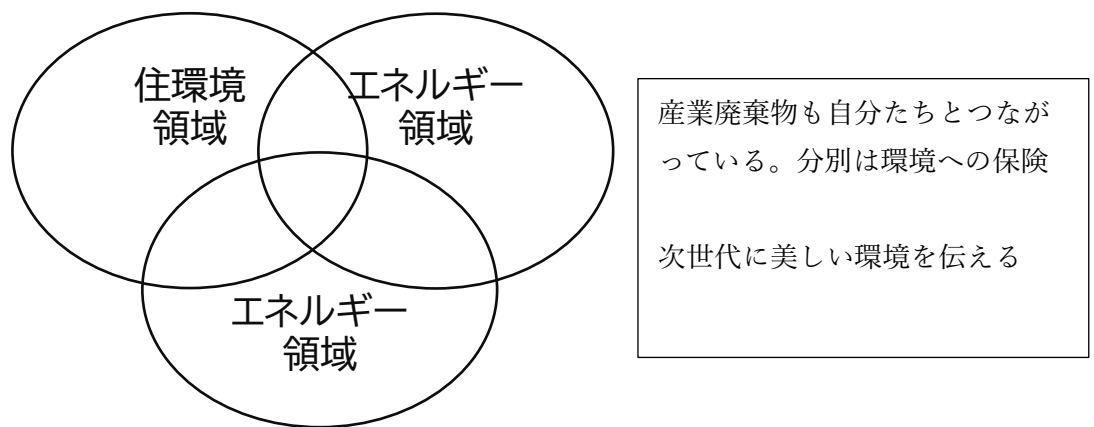
ゴミになったあとへの意識をもってもらう

古くなった作業着 → しおり、コップ、カトラリー

ペットボトルキャップ → フラワーポット「ハナマル」

⑤環境エース 一元くん の開発

企業の廃棄業務を効率的に一元管理するための先進的なシステム。廃棄物管理の「ややこしさ」を解決する。



(3) 授業を通しての学び

○まちづくりでは、同じ方向を目指すことが大切。学校と自治体、地域との連携ならこれでよいが、企業の場合は、利益も生み出す必要がある。ビジネスとは、誰かの役に立つこととして利益を得ることである。

○企業との連携においては、お願いしたいことをはっきりと伝えることが肝要。(学校にはお金がないので、旅費も謝金もないことを伝える)

○学校と連携することの企業側のメリット

社内での情報伝達や関連企業との話し合いにおいても、考えてもらうためには「問い」が大切であることを学んだ。教員から伝え方を学びたい。

▼児童の変容として、ゴミの減量や分別にはいたらなかった。

【意見交流】

・お祭りの復活も視野に入れて企業を選んでいてことに驚いた。企業側も一般の方々に事業を知ってほしい、広報したいというタイミングがよかったのだと思う。

・子どもたちの意識化はできたけれど行動変容には至らなかったのはなぜか？

→ 学びの中に三間が不足していたと反省している（さんま（時間・空間・仲間）子供たちが自由に遊ぶ時間・遊ぶ場所（空間）・一緒に遊ぶ友達（仲間）の3つを総称した造語）。もっと分別体験をするなどのフォローアップが必要だった。

- ・この取り組みを継続するためには、特別活動に位置づけてはどうか。
- ・マテリアルリサイクルには批判（品質劣化、水の汚染）もあるが、減量化にはなっている。
- ・企業ではどのようにして出前授業をつくっているのか？まず、社内で社員を対象にワークをやってみて、改善案を考えている。
- ・学校と連携するメリットとは
伝え方、話し方などが営業に生かせる。子どもたちの反応から自分たちの仕事の大切さに気付かされ、自分の会社が好きになる。さらに説明できるように調べたり考えたりするようになった。
- ・授業を組み立てて進めていくうえで、教員の熱意は大切だと思った。総合的な学習の時間は先の見通しがもちづらく、前もって計画できるのか？
→ まちおこしという核はブレないが、幅広で備えておく。今回の場合は、祭りの復活を通して関係人口を増やすことがまちおこしにつながると考えていた。
- ・学校と一緒に取り組んでいるところに感心した。教えるだけでなく、体験させていることが大切。将来的に人材獲得にも影響するかも。
- ・自分も子どもの意識の流れを大切にしたい授業をつくっていきたい。